『アジアにおける政治学研究班』

安　　世　舟
（法学部教授）

中間報告

古代より政治学の発達は、「政治の世界」への民衆の登場と不可分の関係にあるというH・ヘラーの主張を待つまでもなく、近代政治学の発達も民主主義の発展と不可分の関係をもっていた。『アジアにおける政治学』をとり上げて研究するに当って、私の分担領域として「韓国における政治学」が割り当てられたので、5年計画でこのテーマについての研究を進めている。これまでの研究について次のように中間報告したい。

韓国における民主主義は、「日韓併合」後ようやくその発達の萌芽がみられたが、しかしそれは日本の帝国主義的植民地支配状態からの解放・独立を目指すナショナリズムと表裏の関係にあり、その結果、民主主義運動はナショナリズム運動と言っても過言ではなかった。政治学の分野でそれがどのように反映されたかをみると、ナショナリズムの朝鮮版として民族独立のための政治思想が展開されていったが、現実政治の科学的分析を土台とする「科学としての政治学」の発達はみられなかった。とはいえ、ソウルにある日本の植民地大学の「京城帝国大学」では、アメリカ政治学、とりわけラスウェルの政治人格論の影響を多分に受けた戸沢鉄彦教授等が政治学を講じていたが、それは「朝鮮」という地においてであっても、日本の近代政治学の延長にすぎなかった。

韓国において政治学の発達は、言うまでもなく、昭和20年8月15日以降、日本の敗戦によって念願の独立を獲得し、国家建設の進行と共に始まったとみられる。しかし冷戦が始まり、それは2つの分断国家を結果させ、あげくの果ては同族相殺し合う内戦の朝鮮戦争へと急速に暗転した。南半分で成立した韓国で休戦条約締結後、経済の近代化を目指す朴政権が登場し、16年間の強権独裁政治が続き、その後、それと基本的に同じ性格をもつ全斗換軍事独裁政権が七年間も継続し、ようやく一昨年の大統領選挙で韓国政治の「民主化」が始まってその模索が続いている。そうした政治的環境の下で、新しい国家装置建設に必要不可欠の行政官の養成が大学の政治学部や法学部に期待され、行政学の発達がみられた。さらに冷戦によって民族の運命が強く左右されている現状に規定されて、国際政治学の研究に政治学徒の多くのエネルギーが注がれている。ところで無から出発した韓国における政治学のモデルは、アメリカ政治学である。戦後日本でも昭和30年代の中頃からアメリカ

政治学の受容が本格化し、現在、政治学の指導的学者の多くはアメリカ政治学の「伝道師」といっても過言ではない。第二次大戦後、アメリカが世界のヘゲモニー国家として登場すると共に、政治学の世界でもアメリカの政治学が支配的風潮と化したが、同じアメリカのヘゲモニー下にある日本と韓国では国内における政治状況の違いによってアメリカ政治学受容においても著しい相違を示している。すなわち日本における政治学は韓国におけるそれに比べて、むしろD・イーストンの政治システム論などの政治理論の分野が際立つのに反して、韓国では行政学や国際政治学の分野でアメリカの業績の受容・継承発展は著しく、日本のそれを越えているとみてよかろう。

以上みられるように、一国における政治学の発達は、ある国が国際政治上の置かれた地政学的状況や民主主義の発達の程度と深い関係がある。政治状況と政治学は両者相互影響の関係にあり、政治学の発達の研究を通して一国の政治状況の展開の様相を捉えることができるし、他方、ある国の内外政の研究からその国の政治学の展開を伺い知ることもできる。そういう意味で、今後、韓国における官僚制の成立と展開、朝鮮戦争とそれがその後の韓国政治に与えた影響等の研究を進め、それが韓国における政治学の展開にいかなるかかわり合いをもつことになったのか、究めて行きたいと思う（1990年10月10日　記）。